
LostDays

國御坂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lost Days

【Nコード】

N8762Q

【作者名】

國御坂

【あらすじ】

高校卒業後就職し社会に出ていた伊沢直哉に親友である大竹稔の死という訃報が飛び込んだ。高校を卒業してわずか四年、二十二歳という若さで親友がかつて同級生が死去するとは予想もしていなかった直哉は悲しみに打ち拉がれる。しかし、葬儀の前日に直哉は死んだはずの親友、稔と再会を果たす。突然の出来事に混乱する直哉に稔は告げる。ここは失われた日々が織り成す世界「Lost Days」なのだ。

プロローグ「始まりの朝」

通勤時間の電車はいつものように満員で息が詰まる。人ごみが嫌いな俺にとっては苦痛でしかない。座席に座れなかった今日みたいな日は苦痛が三割増だ。

窓の外の流れいく景色を傍観しながら時々、何かしらの折に触れて俺は同じ事を考える。

人はどうして生きているのだろうか？ 何の意味の為に？ どうして人は辛い日々を繰り返して生きているのだろうか。何の意味も目的もなくただ漫然と日々を過ごすだけの生に意味はあるのだろうか。その疑問に答える人はいないし俺自身も答えを持ち合わせてはいない。大体、答えが見つかっていないならそんな事、考えるはずもない。

「おはよう」

両手で吊り革に捕まっている俺は顔だけで振り返り聴き慣れた声の持ち主を見つける。

黒縁の眼鏡をかけたスーツ姿の二十代後半の男性が吊り革にも掴まらず器用にバランスを取りながら立っていた。

「おはようございます」

彼とは仕事と一緒にという訳でもなく歳だって八歳も離れている。普通なら何の接点も持たないはずだった。

一度だけ朝の通勤電車内に彼が忘れていた鞆を届けただけの縁が交友関係にまで発展する訳だから人付き合いとは分らないものだ。「疲れているみたいですね？」

毎日、朝の電車で顔を合わせる為か俺は彼の顔色が良くないことにすぐ気が付いた。いや、もしかしたら仕事柄そういう事を見抜く能力が磨かれているのかも知れない。

勘違いしないでもらいたい俺は医者という訳ではない。高校卒業後に東京の中堅スーパーに就職したしがない会社員だ。毎日、毎

日、数え切れない人の顔色を窺い頭を下げる仕事である。

「ああ……実は家内が入院してね」

彼は苦笑いして頭を何度か掻いた。

「家の事は任せっきりだったから不慣れでね」

「ご病気が何かですか？」

「いや、こっちの方」

そう言うとは彼はジェスチャーでお腹を膨らませるような仕草をした。

それで分からない人が居たら余程の鈍感だろう。

「オメデタですか」

今度は照れ臭そうに彼は頭を掻きながら答える。

「子を持つ父親って実感は沸かないんだけどね……君はいくつだったっけ？」

「今年で二十二歳です」

「若いなあ」

感慨深くそう呟くと同時に車内にアナウンスが流れゆっくりと電車が減速をする。

人でごった返した駅のホームに電車は滑り込み左側の扉が開く。彼は軽く俺の肩を叩いて「頑張つてね」と言うのと電車を降りて行った。

その後ろ背中では家族の為に働く企業戦士もといお父さんという風格が早くも漂っていたように見えた。

父親、か。子供を持つ心境はまだ当分、分かりそうもない。彼女だつて今はいないし。

彼が降りた駅から四つ目の鷺谷で俺も降りる。

定期券をかざし駅の改札を出た俺はどんよりと曇った空を仰ぎ見る。

今日は午後からは雨の予報なので午前中に客足が集中しそうだ。わざわざ雨が降ってる中、買い物したい物好きはいないだろう。

駅前の交差点で信号待ちをしながらすき家の看板を見つめていた

俺はポケットの中で振動する携帯に気が付く。

何だろう。というか誰だろう。

折り畳まれた携帯を広げてディスプレイに映し出されている紺野という名前を見てから電話にでる。

「はい？」

「あゝ。悪いなこんな朝っぱらから」

「いや、大丈夫だよ。どうしたの？」

「実はさあ……」

青信号から黄色信号に変わり赤信号が灯った。目の前にセダンの車が停止線を少し超えて止まる。歩行者用の信号はまだ赤のままです。「実はさあ」の後に続く言葉が来ない。

俺が何？ と聞き返すよりもほんの少しだけはやく電話の向こう側にいる紺野が口を開いた。

「大竹が死んだ」

歩行者の信号が青に変わり俺の周りに居た人集りが一斉に移動を始める。その中で俺は呆然とただ立っていた。

通り過ぎた何人かが怪訝そうな顔もしくは迷惑顔で俺に一瞥しながら歩いて行った。

「お前ら仲良かったから電話したんだが……おい伊沢？」

歩行者の信号が赤に変わりそれに連動して車道の信号が青に変わり停まっていた車が動き出す。

電話の向こうの紺野の声も目の前を行き交う車のエンジン音も人々の足音も喧騒も全てが遠くになっていた。

もう何の音も聞こえなかった。ただ「どうして？」という疑問だけが俺の頭の中を渦巻いて止まらなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8762q/>

LostDays

2011年2月13日12時08分発行